

2018年度 春の大セミナー

【5th C++テーブル 総評】

JUDGE：西山（早稲田4）

Table member: 渡辺（青学3）湯浅（明学3）清宮（早稲田2）中村（早稲田2）郡司（武蔵2）高橋（明学3）井上（青学2）

構成

1. 議論の流れ
2. 順位と選定理由
3. 最後に

1. 議論の流れ

本章では議論の大まかな流れを追います。ジャッジの解釈とテーブルメンバー解釈にはズレがあるかもしれませんが、ご了承ください。思ったことを一言コメントとして残しているので参考にしてみてください。参考にしてみてくださいと言いつつも、疑うことを忘れないで欲しいです。「こいつの言っていること本当かよ」って感じで読み進めていってください。「確かに」って思ったら自分のものにして、「ちげーよ」って思ったら無視して自分の考えの正当性を今一度確認してみてください。

《OP 決めまで》

OP に立候補したのは渡辺（青学3）一人だけであった。体罰厳罰化を掲げるオピニオンシートを提示した。教師には免職を避ける方法があるが生徒には体罰を避ける方法はないというコンパリゾンアイデアについていくつか質問がなされてから、議論がスタートする。

《ASQ》

ASQ では主に C/P の定義、TG の狭義、そしてコンパリゾンアイデアに関する質問に多くの時間を費やした。この段階で TG の狭義についての理解（今回の TG って実際に体罰を受けて苦しんでいる人なの？それとも体罰に対してトラウマを感じている人なの？）が統

一されないまま議論が進んでしまったためにソリューションエリアで議論が停滞してしまったことは残念であった。

コメント：このテーブルだけに関して言えることではないのだが、ASQ において“何が”問題で“何が”ハームで“何が”原因でといった“何”に関する質問はみんなよくしているのだが、“なぜ”それを問題視して、“なぜ”それを原因と考えたのかというような“なぜ”を問う質問がないと思う。なぜを問わない限りオプレのスタンスや価値観は見えてこないと思うから、もう一度 ASQ って何をするべきところなのかなって問いを考えてみてください。

〈郡司（武蔵2）の SOH の主張〉

突然郡司（武蔵2）がテーブルメンバーに「みんな学校で体罰あった？」と質問を投げかけた。7人中3人が自分の学校で体罰が実際にあったと答えた。筆者含めた部屋にいた者全員が「何をするつもりなんや、、、」とビクビクしていると「じゃあ4人の学校は体罰がない学校だから今回の TG は体罰がない学校に転校するっていう方法があるってことが確認できたよね、serious じゃないじゃん」と主張した。清宮（早稲田2）渡辺（青学3）湯浅（明学3）を中心にアイデアの検証が行われていった。最終的に湯浅（明学3）が転校はできても体罰を受けてすでに苦しんでいるから seious だよねと主張し、議論は収束した。

コメント：郡司（武蔵2）のアイデアは春セミで出たアイデアの中でも唯一ユニークさを感じられたものだった。ユニーク＝良いというわけではないが、アイデアをテーブルに落とすうえで考えなければいけないことの一つとして「数あるアイデア（論点）の中で自分のアイデアは最も話す、検証する必要がある、若しくはこのアイデア（論点）を深めるのは面白い、ということをアピールする」ことは大事だと思う。アピールするうえで、アイデアのユニークさという要素は、話す必要性は伝えられなくてもアイデアの面白さを伝えるうえで有効なんじゃないかなあと思う。

〈中村（早稲田2）の C-P linkage の主張〉

ストレスで体罰をするケースは突発的に起こるもので、厳罰化で防げるものではないから、今回の AD からは除こうという主張であった。渡辺（青学3）湯浅（明学3）を中心に質問がなされた。「結局何がしたい」を導くまでに時間がかかったが、最終的に渡辺（青学3）が厳罰化ではストレスケースの生徒が救えないってことだからソリューションエリアで話すのが良いよと提案し議論は収束した。この後中村（早稲田2）のサムカットアイデアはソリューションエリアで認められることになるが、アイデアの内容は同じなので以下省略させていただく。

《solution area》

〈高橋の主張〉

高橋（明学3）「SQ で体罰をしている教師は AP で体罰をしなくなるから学校に残るよね、そしたら体罰を受けたことある生徒のトラウマって消えないじゃん」と主張する。清宮（早稲田2）渡辺（青学3）湯浅（明学3）が中心となってアイデアを検証した。メンバーの間で TG に対する定義のズレ、そしてアイデアプレゼンターが結局何をしたいのかを順を追って聞いてあげられる人がいなかったことが原因で議論は停滞した。最終的に高橋（明学3）が体罰教師が学校に残るせいでビッグ DA が生まれるからワーカビリティは確認できないと主張したら、それは DA の話だからとにかくコンパリで話そうという流れになり高橋のアイデアについての議論は終わってしまった（本当にこれでよかったのだろうか？）

コメント：このテーブルにおいてやらかした感が一番強かったのは高橋（明学3）のアイデアの検証だったと思う。アイデアが出たときに考えてほしいのは①アイデアプレゼンターがしたいと言っていること ②実際にそのアイデアを使ってできること ③そのエリアですべきことである。高橋（明学3）のアイデアをこの三要素に落とし込んでみると①ビッグ DA が生まれるからワーカビリティのオールカットをしたい ②トラウマケースの some cut ③a/l/1 の AD が取れることを確認すること である。①と②の間にずれが生じているときはまずそのズレをテーブルメンバー全員に浸透させてあげる必要がある。その後③は達成できていることを主張し、②って今話す必要性あるかな、ないかなを話せば議論が停滞することもアイデアプレゼンターの不満が残ることもないと思うのでぜひ考えてみてほしい。

〈中村（早稲田2）の主張〉

中村（早稲田2）が「AP では体罰が使えなくなるからもっと厳しい scolding が生徒に与えられることになるよね、そしたらワーカビリティないよ」と主張した。渡辺が中心となってアイデアの検証は進められた。最終的により厳しい scolding を受ける生徒って DA だよね、コンパリで話そうという提案が認められ議論は収束した。このアイデアを検証した後、AD を得る。

《DA》

郡司（武蔵2）の免職を恐れる教師が DA となる。

《コンパリゾン》

渡辺（青学3）が教師には免職を避ける方法はあるが生徒には体罰を避ける方法はないというアイデアを提示した後、湯浅を中心にアイデアを検証中に議論は終了した。

2. 順位と選定理由

1位 渡辺（青学3）

OPとして議論の土台を作ったこと、そしてすべてのアイデアに対してコンスタントな介入をし、議論を収束させるためのSを打っていた点を評価し一位とした。また、人のアイデアを一つ一つ理解をしていこうという姿勢がQやCから見受けられて、とても好印象でした。しかし、アイデア検証において他のメンバーのQCによってアイデアの理解が深まった場面もあったので、油断せずに精進してほしいと思います。アッセンも期待しています、頑張ってください！

2位 湯浅（明学3）

すべてのアイデアに介入したこと、そしてテーブルを前に進めるようなSを打っていたことを評価し、2位としました。テーブルを前に進めようとする姿勢はこのテーブルの中で一番強く感じられました。“今、すべきこと”を真っ先に示すことができたのは湯浅(明学3)だと思います。これからは前に進めるということだけでなく、テーブルの理解を統一したり、アイデアを浸透させるようなアプローチもできるようになるといいですね。

3位 清宮（早稲田2）

人のアイデアにコンスタントに介入していたこと、そしてメンバーの理解を統一させるようなCをして議論に貢献していたことを評価し3位としました。二年生は風潮として自分のアイデアを出して戦う方法が主流になっている中で、人のアイデアに介入してここまでの結果を出したことには自信を持って良いと思います。アッセンではもっと上を目指して頑張ってください。

4位 中村（早稲田2）

C-P linkage, ワークでの反論提示を評価し4位としました。二年生でありながら堂々とわかりやすいプレゼンをしていたこと、終始ニコニコ笑顔を絶やさなかったことは称賛に値します。アッセンまであと三か月あります。いくらでも成長できると思うのでここで終わらせず、頑張ってください！

5位 郡司（武蔵2）

SOHで提示したアイデアを評価し5位としました。コメントでも言いましたが、アイデアがユニーク（アイデア自体がユニークというより出し方がユニーク？）で個人的に良いなと思いました。これからもテーブルメンバーが楽しめるようなアイデア作り頑張ってください。

6位 高橋（明学3）

ワーカで提示したアイデアを評価し、6位となりました。4位、5位との差はアイデアの浸透率です。自分のアイデアをしっかりと伝えられるようになるといいですね。

7位 井上（青学2）

介入が限定的であったためこの順位としました。いつもはもっと積極的にディスカッションできていることを知っているので、次のアッセンでは最後まで諦めずに頑張ってもらいたいと思います！

3. 最後に

春セミお疲れ様でした。2泊3日めちゃくちゃきつかったと思うけど、頑張ったことは絶対に無駄にはなりません。良い結果が残せた人は油断をしないように、悔しい思いをした人はアッセンで大逆転できるよう頑張ってください。5thテーブル見ていてとても楽しかったです、ありがとうございました。

文責：西山（早稲田4）